

XenosagaI・II - 第十六話 再生 - Regeneration -

マーグリズ：貌下におかれましては、ご機嫌麗しく――
??? 『うわべの挨拶はよい。

U-TIC 機関を預けて以来、そなたに期待しているのは、常に得でも教えでもなく、利だ。』

マーグリズ：はっ、教皇貌下のご期待に応えるよう、さらなる精励に努めるつもりであります。

教皇セルギウス『――うむ。セラーズのレポートは、より詳細なものが提出された。そなたも目は通しているな? 』

マーグリズ：70時間前から、星団連邦の全域を脅かしているグノーシスの大量発生、
オリジナルゾハルの波動が拡散した影響であるとか――

教皇セルギウス『そうだ、十四年の時を経て、ついに道は開かれた。

あの下賤の者の手によるということが不満ではあるがな。

いずれにせよ、我ら移民船団は我らの正当な管理物であるオリジナルゾハルを取り戻さんがため、

旧ミルチアに向かわねばならぬ。だが、我らの教下にある太陽系もすでに20以上が、通信途絶した。』

マーグリズ：それでも、星団連邦全域の状況に比すれば、教区の被害はむしろ少ない――と言ってよろしいかと。

教皇セルギウス『教皇庁軍の全戦力を治安維持に割いているのだからな。

しかし、これでは旧ミルチアへ向かうことがかなわぬ。連邦軍に遅れをとってしまうことは必定。』

マーグリズ：はっ――そのためのU-TIC機関であります。

――あのミルチア紛争直後、ヨアキム・ミズラヒが遺した学術機関の体面をもって、

旧ミルチア政府軍の残党を、受け入れていただいた恩、忘れたわけではございません。

教皇セルギウス『殊勝だな。だが、剣の価値は、ただ切れ味のみによって定まるもの。そうであろう? 』

マーグリズ：はっ、貌下の御意のごとく。すでに、艦隊の編成は進めさせております。

100時間後には、旧ミルチアへ向けて発進が可能です。

あのU.R.T.V.も手駒としては、使いようがありましよう。

教皇セルギウス『――いいだろう。だが、覚えておけ。異端審問官長。

私はそのU.R.T.V.を好かぬ。ある下賤な男を思い出すのでな。それだけは覚えておいてくれ。』

マーグリズ：――御意。

再 - Regeneration - 生

シオン：ん————

————いい朝。

ジン：ええ、旅立ちの日和ですね。

シオン：兄さん————

ジン：あなたが精を込めたという KOS-MOS に会えないのが残念ですよ。

縁があったら、この家にも連れてらっしゃい。

シオン：連れてらっしゃって、KOS-MOS は最高機密————

ううん、そうね。それもいいかな。機会があったら、そうしてみる。

ジン：ほう、ずいぶん肩の荷を下ろしたような表情[かお]ができるようになりましたね。

（ケイオスくんや Jr. くん——仲間たちのおかげかな）

シオン：今日は二局で起動した KOS-MOS の試験に立ち会った後、そのまま曙光に上がると思う。

じゃあ、行くね。

（次に第二ミルチア[ここ]へ来たとき、お墓参りに行けるようになると、いいな————）

ジン：ええ、行ってらっしゃい。気をつけて————

—

シオン：さてと、二局に顔出すまで時間もあるし、少し第二ミルチアの空気を吸いだめしとこうかな。

シオン：Jr. くん、みんな——！ どうしたの、おそろいで？

Jr.：いろいろあったからさ、モモはまだこのあたりを歩いてないんだ。

せっかくだから——と思ってさ。

シオン：そういえば、私——この街を案内してあげるって約束してたのよね。

モモちゃん、よかったら一緒に行きましょう。

モモ：ほんとですか！ モモ、嬉しいです。

ケイオス：出勤途中だったみたいだけど、大丈夫なの？

シオン：平気平気——あの兄さんと一緒だと、信じられないくらい、早起きさせられちゃうのよ。

まだ、たっぷり時間があるんだ。

Jr.：よっしゃ、そうと決まったら、美味しいもんでも食べに行こうぜ。

シオン： あ、それならとびっきりのカレーの店が――

Jr.： もう行ったって！

Jr.： あれ――デュランダルブリッジからだ。それも特S級非常帯で！？

なんだ、いったい――

こちら Jr. だ、デュランダル、どうした――？

メリィ『どうもこうもないで！ セっかく買うたネタ本が間違っただの届いたわ！

うちが注文したのは、『漫才古典こてん』やで！

なんで『落語一万席』なんぞ送ってよこすんや！

あんなんで笑えるのは、連邦主星の文化人きどりのタコだけやわ！』

Jr.： メ、メリィ――お前、どこにかけてんだ？ それも、非常帯通信で――

メリィ『あん？ まだガタガタ抜かすんか――って、ちび様？

なんで、ちび様が U.M.N. 通販のクレーム受付センターでオペレーターやってますのん？

財団理事の棒給じゃ、足りへんのですか？』

Jr.： だ、誰がバイトなんかするか！ だいたいお前こそ、ブリッジで通販なんかするヤツがあるか！

メリィ『はあ？ そんな公私混同なんて、ようしませんわ。

ほら、ここ、うちの私室ですわ。』

Jr.： そんなん見せなくっていいって！ ああもう、少しは片付け――

ジギー： Jr.、取り込み中、すまんが――

Jr.： 別に取り込んじゃいねえよ！

ジギー： 先ほどから、なにか妙だ。なにかの予兆、ではないのか？

シオン： 予兆――ですか？

モモ： モモの観測範囲には、まだなにも――

メリィ『ああっ、ち、ちび様！』

Jr.： どうした、メリィ！

メリィ『空間歪曲が――！ これは――』

Jr.： メリィ！

モモ： ！ Jr. さん！ 空間歪曲、モモも感知しました！

ジギー： どこだ、モモ！

モモ：直上、惑星軌道上にゲートアウト！ グノーシスです！

Jr.：こちら Jr. だ、デュランダル！ 地上に A. G. W. S. 隊を下ろしてくれ！

シオン：アレンくん、聞こえる？ KOS-MOS はどう、起動できる！？

Jr.：ちくしょう、どうなってやがる！ 通信がつながらねえぞ！

シオン：こっちも――U. M. N. が非常帯も通常帯も遮蔽されてるわ。

モモ：第二ミルチア全域で、U. M. N. のアドレスが強制的に書き換えられています――

こんな、気持ち悪い――

Jr.：無理すんな、モモ！

ケイオス：もうすぐ、自治政府軍も駆けつけてくるよ。でも、それまでに――

Jr.：ああ、俺たちにできることをやるしかないか。

シオン：ええ、やりましょう。E. S. 転送！

な、なんで――

モモ：U. M. N. が正常に機能していないんです！ これじゃ、E. S. を呼び出せません。

ジギー：頼りは肉弾戦のみ――というわけか。仕方あるまい。

―― 

リユーリック：ディミトリ様、艦隊の整備はあと4日もあれば、完了します。

書類上は、グノーシス討伐艦隊となっておりますので、整備の上からも艦艇数からしても、
ご満足いただけるだけの編成になるかと思われます。

ユーリエフ：――時間がかかりすぎるな。これでは、移民船団に先をとられる可能性があるぞ。

リユーリック：は、はあ、それでは予定の繰り上げを指示してまいります。

ユーリエフ：それも無論だが――リユーリック、艦隊には貴様も同行せよ。

リユーリック：わ、私がでありますか――？ ですが、私のような事務畑の者がお供しましても、お役には――

シトリン：――誰も、お役に立っていただこうと期待しているわけではありませんわ。議員様。

リユーリック：き、貴様――

シトリン：発進までの準備期間を短縮するといっても、艦隊の安全係数などを低く設定されてはたまりません。

あなたご自身が同行されるなら、準備にも万全が期待できるであろう――そういうご判断だと思われます。

ユーリエフ：シトリンの言うとおりで。戦場で生き延びたいのなら、

己に与えられた職責をまっとうすることだ。

そうすれば、艦隊は勝利し、お前の身にも、なんら危機は及ばぬであろう。

リューリック：はっ、わかりましたーそれでは、私はこれで。

シトリン：（ーー小心者め）

ユーリエフ：うーうううー

シトリン：ディミトリ様！

ーニグレド！

まだ、意識が消滅していなかったのー？

ガイナン：意識がーどうということだ？

それに俺は、なにをーここはー

シトリン：なにもー急に病む必要はないわ。

ガイナン：君はー誰だー

シトリン：あなたは14年前、父殺しの罪を犯した。

でも、それは、お父様の予測の範疇に存在する罪だった。

だから、罰は罪より先に用意されていた。いいえー

これは罪ではない、栄光なのよ。

ガイナン：俺はー

シトリン：与えられた任務をまっとうすることができなかったルベドやアルベドのことなど、忘れてしまいなさい。

あなたは私とともに、お父様に仕えるの。身も心も捧げてー

ガイナン：俺はー誰だー

シトリン：あなたはディミトリ・ユーリエフ、私のお父様ー最愛の方ー

第二ミルチア

【 戦闘 VS リザードマン γ、グレムリン γ、トロール γ 】

ジギー：こんなペースでは、市内全域のグノーシスを掃討するのに、時間がかかりすぎるぞ。

Jr.：畜生、E.S. があればー

シオン：モモちゃん、U.M.N.が阻害されてる原因、特定できる。

モモ：いえ、材料が少なすぎて不可能です。ただ、現象が起きている範囲から推測すると――
なんらかの要因が、この第二ミルチアの地表、もしくは低軌道に存在していると思います。

ケイオス：じゃあ、可能性がいちばん高いのは――

シオン：グノーシス、ね。

Jr.：つまり、そのグノーシスを見つけ出して叩けば、後はE.S.で一掃できるってわけだ。

シオン：賭けてみる価値はあるわね、急ぎましょうー！」
（KOS-MOS、こんなとき、あなたがいてくれたら――）

Jr.：ヤバイ、急ぐぞ！

【 戦闘 VS フェアリーβ×2、トロールγ 】

シオン：ここは危険です。別の場所へ避難してくださいね。

@：はい。ありがとうございました。

ジギー：――いかん！

【 戦闘 VS オウドゴギー×2、グレムリンγ 】

ジギー：ここは危険だ。どこか別の場所へ逃げるんだ。

@：うんわかった。おじさんたち、ありがとう。

ジギー：――

ケイオス：いけない――急ごう。

【 戦闘 VS ラタトスク×2、リザードマンγ 】

ケイオス：大丈夫でしたか？ 怪我などは――

@：いえ、大丈夫です。危ないところを助けていただきありがとうございました。

ケイオス：ここは危ないので、別の場所へ避難しててください。

@：はい、わかりました。

シオン：KOS-MOS――

ヴェクター二局

アレン：だから、非常事態だと言ってるんです！

@：そうは言われましても、KOS-MOSの起動には、本社の許可が必要なんですよ。

手続き上だけでなく、プログラムそのものを本社から転送してもらわないと、起動しないんです。

アレン：そんな――U. M. N. が阻害されてる状況で、どうしたら――――

???：――――シオン。

@：？ なにかおっしゃいましたか？

アレン：いや、僕じゃ――

???：――――シオンが呼んでいます。

@：これは――何故！

アレン：KOS-MOS！

同じだ、ヴォークリンデの時と！

@：そんな！ こいつにはプロテクトがかかっているわけじゃないんですよ！

起動プログラムが存在しないはずなのに――何故！

アレン：いいぞ、KOS-MOS！ やっぱり主任のピンチなんだな！

さあ、僕を主任のところへ連れて行ってくれ！

KOS-MOS：――シオン！

アレン：あ、あれ――――

主任を頼んだぞお――

KOS-MOS――――

僕の分までええ――

シオン：——こんなところで、終わりにしたくない。まだ、私は———

KOS-MOS：シオン、これよりあなた方を支援します。

シオン：KOS-MOS！——KOS-MOS なのね！

KOS-MOS：広域ヒルベルト展開、攻撃を開始します。

シオン：ちょ、ちょっと待ってよ！ みんな、避けて！

モモ：え？

Jr.：なんだぁ！

KOS-MOS：マイクロミサイル——発射。

ミサイル着弾、並びにグノーシスの残存を確認。

これより、近接戦闘に移行します。

【 戦闘 VS ギガース β 】

KOS-MOS：敵殲滅を確認。残存勢力、ありません。

シオン：KOS-MOS——

Jr.：これがKOS-MOS！？

ジギー：ずいぶん、姿が変わったものだな。

KOS-MOS：はい、模擬戦用筐体から実戦用筐体への換装が完了いたしました。

これにより、私の戦闘力は74%向上したことになります。

ケイオス：——でも、内に秘めている君自身は、なにも変わっていないようだね。

KOS-MOS：はい、ハードウェアは構成が変更されましたが、A. I. は以前のものがそのまま、転送されています。

ケイオス：（そしてきっと——君の心も、ね——）

モモ：シオンさん！

全通信帯域を占有してU. M. N. にアクセスしている存在がいます——！

多分、大型のグノーシスです！

シオン：それよ、きっと！ モモちゃん、案内して。

モモ：はい！

モモ：この向こうですー

Jr.：よし、先を急ぐぞ。

ー

Jr.：こいつが、メリィに『落語一万席』を誤配させて、俺にバイトの濡れ衣を着せたヤローか。

【 戦闘 VS ミノタウロス β 】

ヘルマー『おお、U.M.N. が回復したのか。』

Jr.：ああ、またヴェクターのーいや、シオンやKOS-MOSの力を借りてのことだけだな。

ヘルマー『感謝の言葉もない、ウヅキくん。きみたちのおかげで、第二ミルチアは救われた。』

シオン：いえ、ここはー私にとっても、故郷ですから。

ヘルマー『これで我々も、A.G.W.S.を投入できる。残敵の掃討はまかせてくれ。』

Jr.：いいのかよ、こっちもE.S.を使えるようになったんだから、手を貸すぜ。

ヘルマー『ずいずうしい願いで恐縮なのだが、君たちには、頼みたい別のことがあるのだ。』

シオン：別のーこと？

ヘルマー『大型のグノーシスが確認された。他のグノーシスが出現するゲートは、その個体が発生させているらしい。

場所はー低軌道上だ。対地速度12000km毎秒で周回している。』

ケイオス：低軌道上を対地速度12000kmーそんな奴に接近できるのはE.S.だけだね。

ヘルマー『その通りだ。いつも君たちだけにまかせてしまって、すまないと思っている。』

Jr.：んなこと、言いつこなしだぜ。ところでー

しばらく前からガイナンがいないんだけど、行方を知らないかな。

ヘルマー『実は私も気になっている。連邦主星へ向かったのはたしかなのだが、その後、

音信が途絶えていてなー君の方でもわからないのかね、Jr.。』

Jr.：ああ、念話にも応答がないんだ。

まあいい、いまはグノーシスのことを考えるしかないよな。

ヘルマー『ー助かる。』

Jr.：E.S. 転送！

モモ：E.S. 転送！

Jr.： シオン、KOS-MOS。今度は留守番でかまわないぜ。

モモ： モモたちがグノーシスを倒してきます。

シオン： ーE. S. がないんじゃ、足手まといだもんね。

頑張っ、Jr. くん、モモちゃん。

Jr.： よっしゃ、目標の軌道要素確認。ー行くぜ！

モモ： ーはい！

シオン： ー

KOS-MOS： シオン、いまあなたには、力が必要なのですか？

シオン： え？ ええー

やっぱりみんなのー仲間たちの役に立ちたいもの。

KOS-MOS： ーわかりました。それでは、システム DINA を起動します。

シオン： システム DINA？ KOS-MOS、いったいなにをー

これはーE. S. ！？

ー

ケイオス： 現在、高度 25000km、対地速度 10000km 毎秒。ー後方に移動物体を確認！

Jr.： 来たぞ、ターゲットだ！

モモ、左右から挟みこんで減速させるぞ！

モモ： わかりました！

Jr.： 今だ！

ジギー： ぐうっ、なんという速度だ。

Jr.： くっ、減速できねえー

モモ： このままじゃ、機体はもっても、モモたちの身体がー

Jr.： くそ、いったん後退するしかねえかー

シオン： ーあきらめちゃダメよ、モモちゃん！ みんな！

ケイオス： （あれはー

やはりーディナ！）

KOS-MOS： シオン、会敵に成功しました。

シオン： （すごいー初めて乗る機体なのに、私の手に馴染むー

この機体、とても懐かしいーなぜー？)

Jr.: シオンと KOS-MOS か! なんで、シオンたちまで E.S. をー

シオン: 話は後! 三機のパワーで減速させるわよ!

モモ: はい!

Jr.: わかったぜ!

『グオオオオオオオッ。』

ケイオス: よし、速度と高度が落ち始めた!

シオン: このまま、無人地帯へ到着させるわよ!

KOS-MOS: 高度 8000m、対衝撃フィールドを発生させます。

Jr.: 突っ込むぞ!

ー

ジギー: なんというヤツだ、あれほどの着地の衝撃にも耐えたのかー

モモ: でも、だいぶ弱ってるようです。

Jr.: E.S. なら倒せる、行くぞ!

【 E.S. 戦 VS リアノー・シー 】

Jr.: すげえ、E.S. が三機かーこれなら、どんな敵にだって、勝てそうだぜ。

ケイオス: (ー

Jr.: なにぼうっとしてんだよ、ケイオス。すごいと思わねえのか?

ケイオス: え? ああ、ごめん。たしかにーすごいよね。

Jr.: だろ!

ケイオス: (ーもう、これ以上、彼の意志に流され続けるわけには、いかないー)

シオン: ー思い出した。この機体、二年前に、ケビン先輩が開発に携わっていたものだわ。

KOS-MOS: はい、ヴェクター・インダストリー第一、第二開発局合同で調整された D.S. ーディナです。

シオン: そう、そうだったのー」

(じゃあ、この懐かしい気持ちは、ケビン先輩のー?

ううん、もっと昔から知っているような気がするー)

